「姫路木綿」栽培 児童たちが挑戦

白鷺小中４年生

校内の畑に丁寧に苗植え

ふわふわの綿花 10月収穫

江戸時代に名産品だった「姫路木綿」を通して郷土史を学ぼうと、姫路市立白鷺小中学校の４年生約１００人が、校内の畑に綿花の苗を植えた。地産地消に取り組む市内の木綿製品店が手ほどきし、同校では初めて栽培に取り組む。

姫路木綿は江戸後期の姫路藩家老・河合寸翁が栽培を奨励。純白色の布は発色が良く、染め物に重宝された。藩の専売制を敷いて高値で取引され、藩財政を立て直す原動力にもなった。

明治以降は輸入綿布に押されて姿を消したが、同市船丘町で「棉屋」を経営する澤田善弘さんが22年前に栽培を復活させた。市内の学校にも普及活動をしている。

姫路木綿の苗を植える小学４年の児童＝姫路市本町

４年生は年間通じて綿花の栽培から糸つむぎ、織物づくりに挑戦する。この日は、校内に設けた畑に５センチほどの穴を堀り、ポットから小さな苗を取り出して丁寧に土をかぶせた。

山本陽菜さん(9)は「上手に植えられた。綿の花は見たことがないので、咲くのが楽しみ」とにっこり。植えた苗は子どもたちが水やりし、10月中旬にふわふわの綿花として収穫できるまで育てる。（成 将希）

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。